

(二) 寺院

現在本町には寺院二を数えるが、町民の門徒関係から見れば、矢野町長慶寺のそれが平谷及川角部落を中核に約百二十戸、隣村熊野跡村専立寺関係者が新宮部落約八十戸に上つている(註)外はすべて町内二寺に つながつてゐる。昔はこの新宮部落東南寄りにその時代の落武者が開基したといわれる「十林寺」があり、 芸藩通志(巻二、五三六頁)には「麿十林寺」とし「熊野村新宮原にあり、今毘沙門堂一字あり」と記され ている。(現在「重林寺」性の家が同部落にあり、後えいとか)次に現存二寺の概要を述べてみる。

1. 光教坊

芸藩通志に「熊野村にあり、永禄年中、僧浄基開基」とある。そもそも、この寺院は鎌倉幕府の執権北条時 頼の頃(一二五五頃)石嶽山上に真言宗の一寺「石水寺」を建立したのに始まり、薬師の靈像は都慧心法師 の作として靈効をたたえられていた。また、同寺の伴呂円教法師が薬師王の靈夢によつて、山下に観音像の あることを告げられ、夜明、小流の木葉に流れ掛つてゐるのを持帰り、あつく礼拝を怠らなかつたという。 当時、観音の靈地は三十三所を数えたが、この石水寺は三十二番所として有名であつた。後、参詣者が絶え るに至つて堂宇も破損し「仏像のみ残る」(光教坊縁起書)状態であつたが、一禪師によつて薬師王像を熊 野に移し、これを熊野開基の仏体とし、同様、石水寺と称し、嵩山城主管田豊後守の菩提寺となつたと伝え られる。天文年間(一五三一〜五四)兵乱が起り、彼豊後守が毛利氏のために滅亡されるに当りこの殿堂も 兵火の犠牲となつて焼失し「仏像のみ残る」悲運にあつたが、永禄年中(一五五八頃)和田七良左衛門剃髮 して浄土真宗に改宗、浄喜(芸藩通志では浄基)と号し、超福寺を開基した。第二代住職浄専の時、准如上 人より「坊号」を許され、石嶽山光教坊と名づけたといわれる。

山門の鐘は明和四年(一七六七)三月十日寄進、六十年後文政十年(一八二七)御堂再建、五年後天保三

年（一八三二）には屋根を瓦葺に改めて現在に続いている。此間、世代は第十四代を迎えた。なお、本堂内の彫刻の粹、絵画の美、金箔の仏像等は古寺の香りを十分ただよわせ、庭前の銀杏の大木と相まつて由緒深いこの寺の荘嚴な雰囲気をかもし出している。

註 社寺旧図書（熊野町役場蔵）の「新宮区内専立寺門徒書抜帖」による。

2. 西光寺

芸藩通志に「慶長六年辛丑（一六〇一）僧祐浄開基」とある。其後天明年間（一七八一〜一七八九）火災にかかり、古文書の多くを焼失したらしい。（註1）明治十一年（一八七八）本堂縁建、総瓦葺となり、この時佐々木高博氏蔵永代日記によれば「地築稀成賑々敷事也此担当惣督村中佐頼佐々木亮之輔大工棟梁林文蔵外二人旧曆九月三十日上棟尤屋根葺迄相濟候也」と記され稀にみる賑わいを呈した模様である。昭和十一年再び火魔に襲われ、同十二年再建されて今日に及んでいる。

一般に神社は以前相当の格式をもち、戸籍の制度定まらなかつた時代には、その事務をも果していた。次の記録は前記永代日記に掲げられているものだが、剃髪、法門に入る場合でも村庄屋を通じて其筋に願出る形式がとられ、身許についての筋立てが相当きびしいものであつたことを物語っている。

寛

一、私儀当村出生ニ而今年廿一才ニ成申父は当村西光寺弟子大忍、去ル天保三辰年病死仕候母は当村百姓孫兵娘させ去ル天保十四年卯年病死仕候然ル處私儀幼年ニ而農業等の働難仕出家希望ニ御座候ニ付右西光寺了心弟子ニ罷成剃髮仕度奉存候親類とも同意之上御願申上候間御赦免被為遊被下候へ、難有仕合可奉存候勿論剃髮後生涯同時ニ罷在俗家住居は仕不申候間願之通相叶様宜ク被仰上可被下候

弘化五年（一八四八）申二月

西光寺弟子大忍悻

市 六

庄屋
与頭宛

右之通り願出申候ニ付得計相訊申処相違無御座何卒早々赦免被為成遣候様奉願上候為其書付取次奉差上已上

庄屋	市良左衛門
〃	養次郎
同見習与頭	幸次郎
与頭同格	貞右衛門
与頭	健太郎
〃	順之助

中野甚之進様
辻 小八郎様
吉田 矢柄様

註1 社寺旧図書（熊野町役場蔵）によれば、明治九年九月西光寺に職猪野恵空及副戸長佐々木亮之輔より地租改正係に提出された書類に「天明八年火難ノ節焼失仕候」と記されている。